特232
719

始

國立公園十和田湖

奥入瀬の勝景

特232
719

國立公園

十和田湖

村木清一郎 著

千丈幕の偉觀

曾我山中と曾我屋敷

岩　風　屏

島　萸　茱

鵜の島

龍ヶ崎

十和田湖

周圍	四十六キロメートル（約十二里）　東西—二里十町　南北—二里十六町
面積	三千百ヘクタール（約六千町歩）　全國第十三位
水深	三百七十八メートル（千二百四十七尺）　全國第二位
海拔	四百一メートル（千三百二十三尺）
濃度	フオーレル液第三號
成因	陷落火口湖
位置	西南—秋田縣鹿角郡七瀧村　北東—青森縣上北郡法奥澤村

キヤンプ指定地

番號	地名	指定地點	距離
第一號	子ノ口	四阿ノ南方平地	燒山カラ三里半 宇樽部カラ三十町
第二號	休屋	旅館太陽ノ北方湖畔	生出カラ一里十町 宇樽部カラ卅三町
第三號	休岱	休屋ノ南方湖畔	休屋カラ五町 發荷カラ一里
第四號	發荷	發荷湖畔	生出カラ五町 休屋カラ一里五町
第五號	鉛山	民家附近湖畔	生出カラ一里八町 大川岱カラ半里
第六號	瀧ノ澤	旅館ノ前方湖畔	鉛山カラ二里 子ノ口カラ三里

キヤンピング注意事項

一、キヤンプ指定地は前掲の通りで標札を立ててある。他の所では許されない。

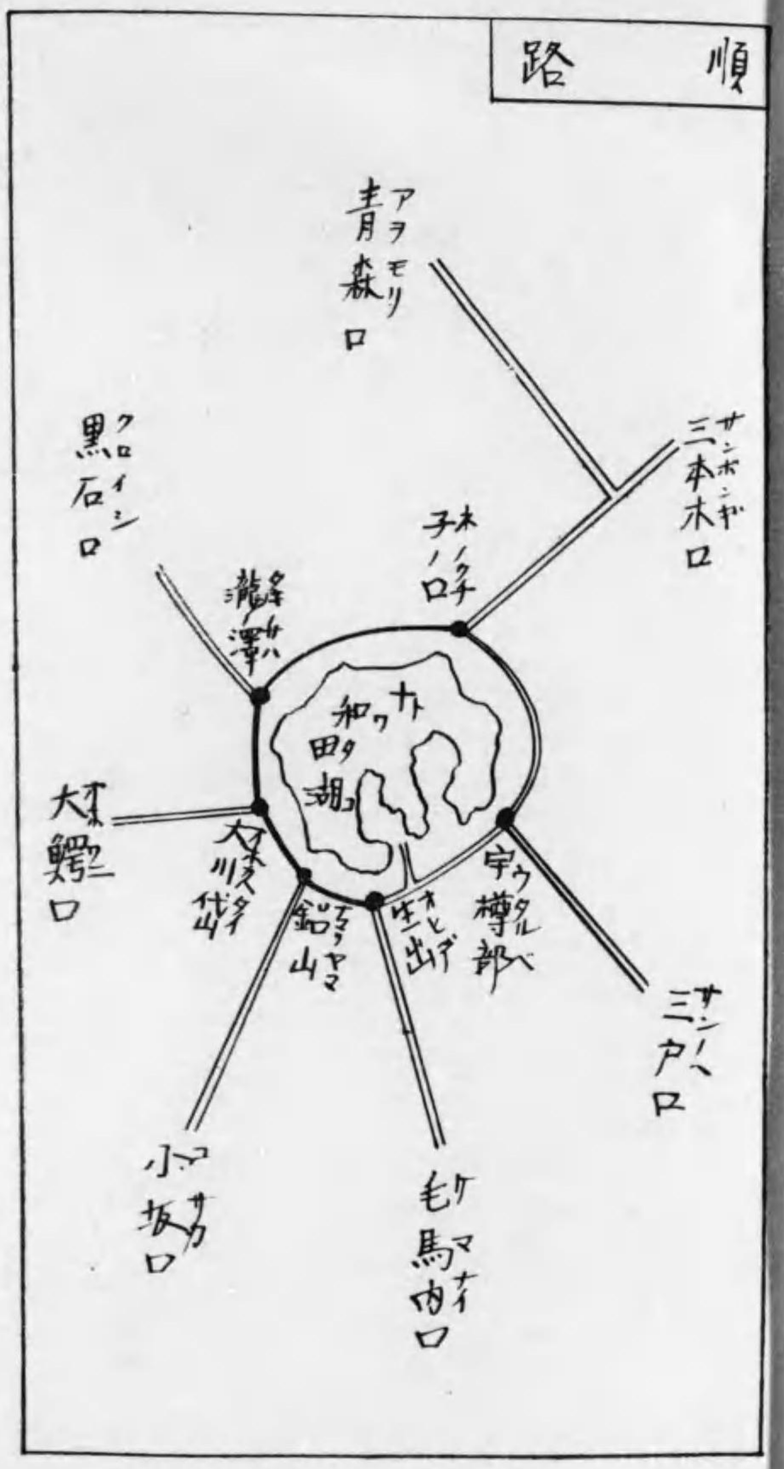
二、焚火は湖畔の砂地を掘つて行ひ、跡地には必ず散水し、土砂で埋め、原形に復して置くこと。燃料は民家から譲受けて使用すること。

三、紙屑、鑵詰空、塵芥等は、一定の所に穴を掘り土を掛けて埋没し、其の他清潔整頓に注意すること。便所は必ず附近の民家のものを使用し、絶對に附近を穢さないこと。

四、キヤンピングサイトは、一般遊覽者の最も注目し易い位地にあるから、是等の人々に不快の感を懷かせるやうな行爲をしないこと。

五、樹木に字などを彫刻し或は植物を採取し其の他自然美を損ふやうな行爲をしないこと。

六、休屋及び子ノ口には三本木營林署の職員が駐在してゐるから、疑義のある際は聽き合はせて間違のないやうにせられること。



汽車

發	着	賃金
盛岡	毛馬內	金壹圓六拾錢
大館	毛馬內	金七拾四錢

毛馬內口

自動車		里程	時間	賃金
發	着			
毛馬內	大湯	二里半	二十分	四十錢
	發荷峠	六里半	一時十分	壹圓五拾錢
	生出	七里半	一時間半	壹圓七拾錢

小坂口

徒歩		里程	時間
發	着		
小坂	藤原	一里	一時間
	鉛山峠	四里	五時間
	鉛山	五里	五時間半

三本木口

自動車 發	自動車 着	里程	時間	賃金
三本木	燒山子ノ口	六里	一時間	壹圓
		九里半	二時間	壹圓七拾錢

三戸口

自動車 發	自動車 着	里程	時間	賃金
三戸	田子宇樫部	二里半	四十分	七拾錢
		九里半	二時間半	貳圓

大鰐口

徒歩 發	徒歩 着	里程	時間
大鰐	切明	四里	四時間半
	白地山	六里半	八時間
	大川岱	七里半	九時間

黑石口

自動車 發	自動車 着	里程	時間	賃金
黑石	溫湯	二里	三十分	參拾錢
	板留	二里半	四十分	參拾五錢
	沖浦	三里半	一時間	
	溫川	七里	一時五十分	
徒歩 溫川	瀧ノ澤	二里半	二時間	

青森口

自動車 發	自動車 着	里程	時間	賃金
青森	横内	二里	三十分	三拾錢
	酸ヶ湯	七里	一時五十分	貳圓
徒歩 酸ヶ湯	蔦	五里	六時間	
自動車 蔦	子ノ口	四里半	一時間半	壹圓五拾錢

國立公園 十和田湖 目次

一 季節……一

五月から十一月まで—四月と十二月と—新緑時—紅葉時—幽邃味—豪華味—旅行隊—キャンピング—短時間の廻遊—太古無人の境—雪の十和田

二 順路……三

普通は三本木口—奥入瀬が目的なら—十和田そのもの—毛馬内口と小坂口—干ノ口からの第一印象—變哲もない雜木山—狹隘單調—島めぐり—箱庭式風光—十和田の眞趣—鳥瞰的大觀—豁達廣大—靈妙神祕—第一順路—發荷峠—紫明亭—甲岳臺—第二順路—逆コース—第三—小坂口—鉛山峠—鍛錬旅行—第四—大鰐口—白地山上の大展望—大川岱—第五—黑石口—溫泉めぐり—瀧の澤—青森口—學術旅行—第六—三戸口—特殊な目的

三 大觀……八

毛馬内驛から—大湯溫泉—羽衣林道—日本八景の一—林中の靜寂—紺碧の水面—仙境—鬱

蒼たる密林—暗紫色の一大岩壁—千丈幕—大町桂月の命名—遠山の雲—亭のベンチ—青すが疊—白樺林道—眼を喜ばせるもの—耳を樂しませるもの—國木田獨歩—武藏野觀—十和田山の一筋道—兼好—木がくれに湛へてをる水の色を思ひ—崖下にさゝやいてゐる波の音をしのぶ—一大林泉—天然の恩賚—雄渾明澄—思はず快哉—青うづ玉—萬山を壓して—八甲田山—外輪山—久遠の昔—別乾坤—天地悠久の靈感—文字通りの山路—輕裝—突然の馬の用意は不可能—一本道—迷ふ心配はない—路傍の標木—電話の假設線——ヒュッテー—喉の渴き—清冽な溪水—寧ろ幸福—放牧の牛の群—一聲叱咤—雪あとの筍—徒に荷物—鉛山峠—白雲亭—湖面鳥瞰の快事—來しくもしるく—絶景に直面して—一里の坂道—大川岱—黑衣の尼僧—教會堂—西洋人の居住—その理由

四 廻遊……二三

生出から船に—休屋—十和田神社—並木路—凉氣—自然の階段—日本武尊—鐵の草鞋—熊野神社—南祖坊の石像—自籠の岩—鐵の梯子—杉の大木—おさごうち場—紙より—お賽錢—裏參道—山の神•火の神—許すならば—再び船に—御前が濱—二島にかけた橋—一帶の砂地—漫歩する人—自籠の入江—十和田らしい幽邃さ—大小の岩壁—菁苔と芝草—靜寂無比—浦と崎と—六方石—操の松—よしやつの浦—みこし—龍ケ崎—蛟龍の蟠居—中湖—湖中の最深處—蠟燭岩—小町岩—大きほとの岩—業平岩—船舟をめぐらして—千本松—劍岩—屏風岩—烏帽子岩—五色岩—絢爛濃艶—いかにも駱駝—一大城壁—特色を完全に獨占—歸路もここを通るやうに—子ノ口さして—御盥石や疊岩

五 溪流……三一

河の眺めは—同じものと思へない—無茶—うしろ美人—奥入瀨も正にそれ—紫明溪—洪水に破壞—三亂の流れ—石ケ戸—鬼人のお松—馬門岩—溪谷狹隘—水勢奔激—阿修羅の流れ—送迎に忙しいほど—瀧また瀧—全身裸出—木の葉がくれ—通路の眞上から—轟渚の響—十和田第一—木立のたたずまひ—この木がなかつたら—遂に如からざらむ—小さい鳥のやうな岩—一定量の水—獅子岩—間もなく子ノ口

六 温泉……三九

近傍の溫泉地—國立公園の一條件—大湯溫泉—利便と興趣—豐富な湧出量—七十五度—鹽類泉—成分—桂月終焉の地—神園—自動車さへ走らなかつたら—高地—四十八度—好適の避暑地—藥師堂—餘材庵—庵の間取圖—自然石の墓—自然人—檜の木の下—低回顧望—附近の沼—泛舟垂釣—酸湯溫泉—治病と探勝—四つの浴槽—湯瀧—思ふ存分—湯治—石倉嶽

—銅像—鑛山植物研究所—荒川渓流—八甲田登山—快晴の日を待つて—偃松帶—お花畑—
太平洋と日本海とに狹まれた本洲—一眸の下に

七　傳　說……四六

美しい女神—赤神と黑神—妻あらそひ—八百萬の神—勝戰得意—負けた方が可愛い—吐息
—蝦夷—數千年經過—炊事當番—八郎太郎—岩魚—蒲燒—たまらなくうまい—全部食ふ—
喉の渴き—桶にありつたけ—谷に下りて—川に口をつけて—七日七夜—いつか蛇體—草木
村の生れ—父を久內—代々同じ名—獨鈷村—大日堂の別當—有徑者—邪念—北沼の大蛇—
妻の懷胎—男子出生—天地震動—鹿角に逃避—三代目—小豆澤に大日堂—蛇性—轉住—生
れながらにして—十七歲の時—心はやさしく—隣村の若者—十和田に殺剝ぎ—二人に事情
を—簑と笠—川水を堰き止めて—靜に幾千年經過—南祖坊—鐵の草鞋の緒がぷつり—永住
の地—禪定降魔—湖に入らうと—一大椿事—俄に波—柴住八郎太郎—挑戰—無數の小龍—
法華經の文字—滿身の創痍—逃亡—永久に十和田の主—綾小路關白—奸者の讒言—都落ち
—氣仙の岡—蓑去—子息是行夫妻—斗賀村の權現堂—別當藤屈式部—無爲な月日—權現の
申し子—熊之進—月體和尙—佛道修業—十三歲—諸國行脚—七十六まで—三十三回の登詣
—最後の熊野詣で—不老不死の祈願—夢の告げ—毛馬內の普門山—鹿角を湖水の計劃—稻
荷樣の苦情—諸方から投石—繩のあと—巨石散在—七座に湖を—鼠—猫—蚤をつけない約
束—遂に八郎瀉まで—勤鼠大明神—小繫

八　鑛　山……五六

金に緣ある地名—鉛礦—二百六十七年前—新道の普請—銀礦—二百十四年前—採掘精錬—
慶長年間—高橋德兵衛—急に礦脈が切れる—神罰か—殿堂寄附—退去—南部藩の管轄—政
府の直營—藤田借區—繁榮に繁榮—小學校開設—漸次衰微—明治廿六年休山—なほ良礦—
世界の名勝地—採掘不許可

九　養　魚……五九

魚類棲息せず—銚子の瀧—魚道が絕たれて—湖岸に鑛山—そこの一役員—和井內貞行—暗
示を得て—湖水の利用—神靈の領知所—廿七歲の時—鯉を放流—非難と嘲笑—郡長—
啓蒙と策勵—六年後—鯉が湖岸を—密漁—湖水使用權—まだ報いられない—小坂に轉勤—
もはや十年—請願巡査—濫獲の豫防—放流數增加—初めて捕獲—親戚に試食—漁獲の用意
—各地の市場に—好評—退職—湖畔に定居—專心經營—すでに歲四十—景勝の宣傳—旅館
建設—鯉が漸次稀薄に—計劃に一頓挫—漁期は二三ケ月—再び來ない—捕獲困難—意外な
運賃—途中斃死—採算不可能—常識の計劃—失敗—專門家に聽く—鱒の養殖—長男を日光

に—次男を青森に—人工孵化法—河鱒と日光鱒との放流—湖外に流下—散住性—これも失敗—財産蕩盡—嗤笑と不信用—素志不挫—カバチェッポ—三年後—回歸性—起死回生の思ひ—資金の調達—彼を相手にしない—ここに知己—理解共鳴—慰藉希望—明治三十六年—カバチェッポ放流—極度の缺乏—長い三年間—物見梯子—彼方から黒光り—間違もなく—夫人の手を取つて—歡喜の涙—努力は報いられた—創業以來二十二年間—四十八歳の中老—初志貫徹—事業の擴張整備—漸く緒に就く—夫人病歿—悲歎—湖畔の住民—生前の德—勝漁神社—國立公園編入の請願—六十五歳で病に斃れる—大川翁の墓

十公園

過去の三時代—將來は國立公園時代—大規模の景致—雲上の神秘境—雄大無比の連峰—名湯仙境—天下の奇勝—損傷輕微—無鑑査—原始的の姿—鑛山業—人間の手—今や時代の寂び—紫明溪—擧げるに足らない—多種多樣—遠望大觀—接近凝視—連山重疊—深潭碧水—激流奔湍—飛瀑幾丈—森林—沼池—大曠野—高山植物園—化學的成層—水溫—一異例—天然記念物—植物群落—代表的植物區系—史蹟—遊覽利便—その日歸り—四通八達—同じ場所に立たなくても—愉安の設備—水泳と垂釣—旅館と休憩所—コートやグラウンド—物足らなさは感ぜずに—若し俗塵の厭ふべきものを見出す人は—湯の宿—五大要項を完全に具備—十和田のために作られたもの

國立公園 十和田湖

朝のもやはれのぼるとき山かひに
あをみとほりてうみは濡れたり

山のうみの水にうかびて蜻蛉數多
飛びもあがらず死にたるらしも

昭和七年八月脱稿

八月の十和田を行けばいたるところやま
あぢさゐの花咲きてをり

十和田の遊覽は、五月の初から十一月の末にかけて行ふのが最も可い。四月ではまだ雪が消え終らないし道路も悪い。十二月になると寒いことも寒いが、滿山落葉して荒凉寂莫となる。何といつても夏の新綠時と、秋の紅葉時とが好適である。殊に紅葉時は全山悉く錦繪と化して、それが滉瀁たる碧水と相映ずる所、全く筆舌外の景觀である。高地にある十和田は一体に寒さが早く催して來るから、九月の末、十月の初にはそろそろ紅葉し出す。沈潛幽邃な新綠の

味を賞するのと、眩惑豪華な紅葉の美を味ふのとは、人各々の好であるが、夏は大勢の兒童生徒の旅行と、休暇を利用した學生のキャンプ生活や、勤人等の遊覽が多く、秋は有閑階級の來遊と、日曜休日を利用して短時間に廻遊しようとする近郷人等の遊覽が多い。一年の半分以上は雪と寒さに閉されて、土着の人の棲息以外、殆ど太古無人の境にかへつてしまふ十和田であるから、強ひてスキーなどを以て雪の十和田を踏破しようといふならば格別であるが、しかしもう其時は旅館が閉鎖して居るから贅澤はいはれない。天下に喧傳せられる十和田の美觀を味はうといふならば、やはり五月から十一月にかけての七ヶ月間になすべきである。

朝はやく大湯を立ちてかきかぞふ十和田
のうみを見まく來にけり

遊覽の季節は夏と秋とで可いとして、順路はどう取るのが興味あるか。普通は三本木で汽車を下りて、自動車で奥入瀬の溪流を遡る、所謂三本木口を十和田の表口だなどといつて、最も重要なものゝやうに稱してゐるが、奥入瀬を見るのが目的ならばそれでも可いけれども、十和田そのものを見ようといふならば、毛馬内口か小坂口か、乃至は黒石口に依るのが最も可いのである。何故ならば三本木口から入る人は奥入瀬溪流の美觀をばほゞ遺憾なく味ふ事が出

來るけれども、肝心の十和田湖を子の口から眺める第一印象が甚だ惡く、何の變哲もない雜木山が湖面に突出してゐるだけのもので、ために湖面そのものも非常に狹隘單調に感ぜられて、これが有名な十和田湖かと思はせられるからである。そしてこれらの人は遊覽船に乘つて所謂島めぐりをして、もと來た路をそのまゝすうと歸つてしまつて、巧緻鎖末な箱庭式の風光のみを見て遂に十和田の眞趣に接せずにをはる事になるからである。十和田をほんとに觀ようとするならば、鳥瞰的大觀に待たねばならず、高所からまた遠方から、遙に廣く眺め渡して、その豁達な同時に幽邃な、汲んでも汲んでも汲み切れない、靈妙神祕な趣を味はねばならぬ。それにはどうしても島めぐりだけでおしまひにしてはならないので、發荷峠からか鉛山峠からか、乃至は大川岱・瀧ノ澤、いづれからでも必ず遠望大觀せねばならない。從つてその第一の順路としては毛馬內口を取つて、大湯溫泉に汗を流し、發荷峠に自動車を捨て、羽衣林道から

奥入瀨上流の大瀧

紫明亭に行つて、眼下に湖面を見渡すことである。踵を返せば白樺林道があるから、林間を逍遙漫歩して甲岳臺から八甲田山を眺めるのも壯觀である。さて生出に下りて型の如く船に乘つて島めぐりをした後、奥入瀨溪流の賞翫に移り、そのまゝ三本木に拔けるなり、蔦溫泉に行くなり、それはいづれでも可いが、奥入瀨は河下から逆に見るのが面白いし、千丈幕は八雲崎から半空に見上げるのが興があるから、もと來た路を引き返して印象を新たにするのも可い。第二の路線は第一と全く反對のコースを取

る三本木口で、この時決して忘れたり、憶劫がつたりしてはならないことは、前にいつたやうに發荷峠その他で大觀し遠望して十和田の眞諦に觸れることである。これを怠つたならば折角龍を畫いて睛を入れないやうに、結局十和田はつまらない、それほどの所でないといふ事になるであらう。この二つのコースはいづれも自動車を利用し得るものであるから、誰にでも出來るのであるが、第三以下は徒歩に依るより仕方がないので、一般向のものでなく、學生等のキャンピングや鍛錬旅行に適してゐる。卽ち小坂口は四里の山路を踏破して鉛山峠から脚下に横はる湖水を見下しながら靜に鉛山にくだるものであり、大鰐口は他のいづれのコースよりも困難であるが、また求め得られない雄大なものである。奥羽本線を大鰐驛で下車し、そこの溫泉で一浴、勞を醫して、山路を切明溫泉に出てから、漸次白地山の登攀をはじめ、津輕平野・八甲田山、最後に十和田湖の出現を一眸の下に收めて、湖岸大川岱に出るものであり、黑石口

は一氣に自動車で溫川溫泉まで來るか、徒歩で七里半の路を途中七ケ所もある溫泉に靴の紐を解きながら悠々溫泉めぐりをして來るかして、さて瀧ノ澤峠から十和田湖の正面を眺めるのであるが、鉛山峠などと違つて正面は却つて變化に乏しくて面白くないと思ふ人があるかも知れない。最後に青森口は青森から燒山まで來て三本木口と合体するのであるが、これもまた途中、酸ケ湯・猿倉・蔦などの溫泉地があるから、溫泉めぐりが出來る上に、東北帝大の高山植物研究所があり、植物園があるから、學術旅行ともなる路線である。大抵自動車が通るけれども、酸ケ湯から蔦まで五里の間は歩かねばならない。この外三戸口といつて、宇樽部に出るものがあるけれども、昔は兎も角、今は特殊の目的でもない限りあまり利用するものがない。

自動車を發荷峠に乗り捨てて歩めば湖は
まなしたに見ゆ

毛馬内驛を出發した自動車が、大湯溫泉を通り止瀧發電所を過ぎて、漸く登り路を登り初める頃は、谷が深くなり雜木林が多くなつて、そろそろ十和田に間近くなつて居る事を覺えさせる。やがて峠にさしかゝつたなと思ふ時分、車の速力がのろくなつて掛茶屋風の家の前に止る。そこから湖岸の生出に電話を掛けて、途中屈曲の多い—五十六曲もある—狹い坂道で自動車が行き逢つて衝突するやうな危險を避けるために、豫め先方に通知して置く。車は間もなく動

き出すが、いくらも走らないうちに路の左側に羽衣林道と書いた標木の立つてゐるのが目につく。心ある人はそこで車を乘り捨てて、山毛欅や白樺の生ひ茂つてゐる林の中の路を三町ばかり歩いて行くならば、白樺作りの瀟洒な東屋の建つてゐるのを認めるであらう。紫明亭といつてゐる。傍には「日本八景十和田湖」の碑が建てられてゐるが、此處からは湖面が眼下に見おろされる。林中の靜寂にひたりながら、飽くまで澄み渡つた紺碧の水面を見つめてゐると、たとひ一時でも俗世間の紛雜が忘れられて、いつまでもかうして此の仙境に居たいやうな氣がする。眼をあげると湖中に突出した二大半島の横顏が見える。前のは中山半島でその後のは御倉半嶋である。いづれも鬱蒼たる密林に蔽はれてゐる中に、暗紫色の一大岩壁が横に長く走つてゐるのは御倉半嶋の大部分をなす豪快無比な千丈幕である。

一体、千丈幕といふ名稱は大川杜月のつけたもので「千尺の斷崖、西北より起り、南をめぐ

紫明亭から見た湖面

りて東に至り一山を取り圍む。長さ二十四五町もあるべし。此の如きは他にその類を見ず。何か名があるかと問へば無しといふ。千丈幕と名付ては如何にといへば皆可と稱す。百間幕なら他にも多くあり。千丈幕は御倉山の特色にしてかねて十和田湖の一特色なり。」といつてゐる。

わが前におほきみづうみよこたはり
戸來の山の雲はうごかず

この岩壁を越えて遙か彼方に聳えてゐる遠山は、

右にある戸來嶽、左にある御子嶽の諸山である。雲はこれらの山々に屯して、いつまでもその形を改めない。天地ひとしく靜寂にこもつて、暫時は人間の物音を聞かない。たま〳〵湖面を走る遊覽船の汽笛と、峠をのぼりおりする自動車の警笛とが、いかにもこの神祕境に不似合なもののやうに、近代的な俗音を立てる外は、雜木の間を飛翔する小鳥も聲を呑んで、みだりに囀らうとしない。

白樺のあづまやに來てまなしたに青すが疊しけるうみ見つ

亭のベンチに腰をかけて再び湖面を眺め渡すと、あるかなきかの小波を織つた湖面は、さながらすがすがしい青疊を敷いたやうに日に映える。亭には觀光者の姓名や感想を書きしるす

ために芳名錄が備へて居るから、眺望のついでに筆を執つて見るのも一興である。

林道を行けば眞夏の十和田やま雜木のなかに鶯なくも

羽衣林道を引返して、緩傾斜の坂路を數十歩登りつめると、右側に白樺林道と標した門構へやうのものが立つてゐる。それを潜つて路に引かれるままに右折左曲して何處までも歩を運んで行くならば、豁然として開けた眺望絶佳の甲岳臺に達する。しかし、その間殆ど湖面を見ることのないのを憂へてはならない。たとひ湖面が見えなくても、吾々の眼を喜ばせ耳を樂しませるものは到る所にある。國木田獨歩は嘗つていつた。「武藏野を散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其處に見るべく聞くべく感ずべき

甲岳臺から見た湖面

獲物がある。武藏野の美はただその縱横に通ずる數千條の路を當もなく歩くことによつて始めて得られる。春夏秋冬、朝晝夕夜、月にも雪にも風にも霧にも霜にも雨にも時雨にも、ただ此路をぶらりぶらり歩いて、思ひつき次第に右し左すれば隨所に吾等を滿足させるものがある。」と。それは武藏野に於ける幾千條の路、これは十和田山の一筋道である。十和田で路に迷ふことを苦にするものもあるまいが、湖面の見えないことを不平に思ふものがないとは限らないだらう。しかしさうふんだんに湖面を

見ることばかりが能でもあるまい。兼好ではないけれども、木がくれに湛へてをる水の色を思ひ、崖下にささやいてゐる波の音をしのぶのも身にしみて趣があるではないか。まして此所は吾々の見馴れない稀な木々のたゝずまひ、吾々の聞き知らぬ珍しい小鳥のさへづりなどを、到る所で味ひ賞することが出来るのである。吾々は普通の庭園や公園に求められない雄大・荘厳・深玄の妙味をこの一大林泉の中から贏ち得るのである。この天然の恩賚を十二分に受けながら、間もなく到りつく甲岳臺に立つと、そのあまりに雄渾明澄な景観に思はず快哉を叫ばずに居られないであらう。

見おろせば十和田のうみはおほいなる青うづだまをいけにけるかな

ここに世に珍しい大きな青玉があるとする。それが神代の昔に神様に置き忘れられて、いつ地中にいけられるともなくいけられてしまふ。そして長い長い年月の間に不思議にもその玉が自然に溶けて水になつてしまふ。それが十和田湖となつて眼前に横はつてゐるのではあるまいか。いま甲岳臺から俯瞰する湖面は一つの大きな碧玉のやうに明朗そのものである。

眞木の立つ荒山なかに神代ながら十和田のうみはしづもりてあり

五百重なす青垣山あひに大きみづうみ成りいでにけり

御花部山を前にして、その後には赤倉岳・乘鞍岳・駒ケ峰・櫛ケ峯・下岳など、殆ど數へ切

れぬ高峯峻岳が並び立つて居るが、天氣の好い日ならば、更に高く萬山を壓して魏然雲際に聳えてゐる山が見える。有名な八甲田山である。これらの諸山から他の三方を取り圍む外輪山に眼を轉ずると、そのはじめ十和田湖がこの世に出現した久遠の昔が思はれてならない。人間擾々の世からいしくも遠く離れて居る十和田の別乾坤は、神代そのまゝの幽玄・深邃・靜寂を保つて天地悠久の靈感を與へずに置かないのである。

わが前の草にとまれるあきつふたつつひに動かず
われはうみを見つ

朝五時小坂を立つならば十時頃には鉛山峠に達する。

蓬萊島附近

鉛山を來れば十和田のうみは見ゆ汗
にくもれる眼鏡を拭ふ

文字通りの山路で、而も全然上り路であるから、そのつもりで輕裝せねばならぬ。乘馬の便もないではないけれども、それを得ることは可なり困難で、前以て用意して置くならば別だが、突然、馬を出して呉れといつても不可能である。どうしても徒歩に依るより外ない。山路ではあるが、一本道であるから、迷ふ心配はない。ただ小坂から藤原村までの道筋が數條あるから、いづれが最も便利であるか、出發する時に聞いて行くならば、そのあとはたつた一人でも何等の不安なしに歩かれる。それでも初めての山路で當がつかないと思ふ人は、路の所々に立てられてゐる道標と電話の假設線とに眼をとめて行つたならば、不要な取越苦勞から救はれるであらう。途中に熊坂造林事務所があるが、俗稱仲小屋といつて、十和田遊覽者のために休息所として開放して居り、やがてヒユツテに改築される計畫がある。夏の炎天下、而も草いきれに蒸されての山旅であるから、喉の渴くこと夥しい。用意の水筒もいちはやくからつぽになる。しかし山間隨所に湧出してゐる清冽な溪水を掬ぶことが出來るから、とゐすれば腹をこはす不良なサイダーなどを賣る可加減な掛茶屋のないのが寧ろ幸福であらう。放牧の牛の群が時々道路に擁して人間の來山を不思議がるであらうが、進んで危害を加へるものでないから、ステツキを擧げて一擊叱咤

するならば、忽ち路傍の草むらに姿を隱してしまふに違ひない。ひつよとすると六月の中旬頃まで消え殘つた雪をそこらの谷間に見出す鉛山の事であるけれども、雪のあとからすぐ萠え出す筍は、氣を付けて見て行くならば到る所にその雄大な長莖を探ることが出來る筈である。しかしそれは珍しいだけで徒に荷物になるから採つても仕方がない。汗を拭き拭き鉛山峙にさしかかると、もうそこから湖岸までは一氣に下り得る坂路であるから、今まで嘗めた山徑登攀の苦痛は一掃せられるけれども、その前にそこに新に設けられた白雲亭に少憩して、汗を乾かしながら湖面鳥瞰の快事を味はねばならぬ。

汗あえて來しくもしるくわが前にあらはれたるか

十和田のうみは

鐵島附近

よくもかういふ湖がこの山上にあつたものだ。これでこそ汗を流しながらやつて來た甲斐があつたと思ふ。

大き湖やいま眼下に開けたり山の苦しみを我はし悔いず

覺悟はしてゐても山路はつらい。しかしこの絶景に直面して見ると、そんな苦痛は何所かにふつ飛んでしまふ。おゝ、十和田よ、十和田よ。と歡呼しながら坂を下ると、一里の路もまたゝく間に盡きて、

キャンプの影の點在する湖岸に達する。吾々はここから少しく歩を轉じて大川岱へ行つて見る。途中林道を濶歩する痩身長軀の西洋婦人にともすれば遭遇する。時には全身黑衣を纒うた異人の尼僧を見ることもある。大川岱には彼等の敎會堂が建つてゐるほど多くの西洋人の居住者があるのである。彼等は何故に他の湖岸に住むことを嫌つて此所に居を定めてゐるか。その重な理由は、此所がどの湖岸よりも風光絕佳であるからである。彼等が箱庭式の小さな眺めを喜ばないで、全体としての大きな勝景を求めるからである。最も變化に富んだ、最も出入の多い中山・御倉の二半嶋を半正面から見得て、交通の利便に乏しくない湖岸の部落は大川岱を除いて他にないからである。吾々は俗臭紛々たる旅館に一夜を空費するよりも、この大川岱に來て民家の一室から湖岸第一の風光を賞味すべきであらう。最近、七瀧村によつて一大旅館建設の計畫が發表せられた。なほ十和田湖の開拓者和井内貞行夫妻の墓も此所にある。

うみぎしに近づきこげばこだる木の岩に
かくるる鴨の鳥あり

生出から船に乘ると、休屋に達する三十餘町の間、西湖の中には何一つ見るべきものがない。休屋に着いたら船を下りて十和田神社にまゐるために老杉森々たる並木路を進んで行く。どんな暑い日でも此所ばかりは常に凉氣がこもつていかにもすがすがしい。熔岩の凝結した黑光りのする自然の階段を登ると、さして大きくもない社がある。日本武尊をお祭りした十和田神社で、傳說にちなんだ鐵の草鞋が澤山奉納されてゐる。熊野神社は傍にある。更に細道

を登つて行くと南祖坊の石像を安置した社があつて、そこから高さ三十尺ばかりの斷崖が突つ立つてゐる。自籠の岩である。そこから六十尺とかある鐵の梯子を傳つて下りると、注連縄を張つた小祠があつて、側の湖岸に杉の大木が立つてゐる。參詣者が身の吉凶を占ふおさごうち場である。おさごはお賽錢の意である。紙捻をひねつて祈念を凝しながら水面に投げると、願望の叶ふ時には紙捻が垂直に水中に沈み、叶はない時には捻が開いてそのまま水面に浮ぶといはれる。お賽錢を包んで投げても同じだといふが、それはどうであらうか。引つ返して裏參道を通る。稜々たる數丈の岩窟の連續してゐる所に山の神・火の神・風の神などの岩窟がある。ここはいかにも爽快な氣分の與へられる所で、許すならばこのまゝ二三日も遊んでゐたいやうな思ひがする。間もなく湖岸に出る。再び船に乘る。船は御前が濱を通つて、惠比壽島と大黑島の側を行く。二島の間にはもと橋をかけたことがあつたさうだが、直きに外れて長くかかつ

自籠の入江

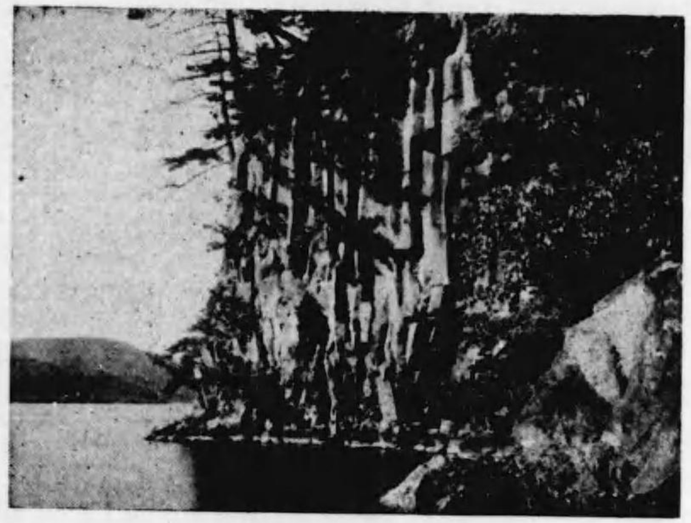
てゐなかつたといふ。ここから見える湖岸一帶は行先に絶えてない砂地になつてゐて、逍遙漫歩する人影もある。やがて兜島が來る。鎧島が來る。種ケ島、蓬萊島が來る。いづれも松を戴いた島といふだけで、大した特色もない。所が自籠の入江に這入ると初めて十和田らしい幽邃さを味はせられる。

もうこの邊になると湖岸がすべて大小種々の岩峭から成つて、而も水際二三寸の所まで青苔が蒸し芝草が生えて、いかにも物寂びた有樣を呈してゐる。この一事でも十和田湖は靜寂無比で、荒い波ひとつ

立たない事がわかる。高砂の浦、九重の浦、尾上の崎、別府崎などを過ぎると、六方石がある。細長い六角形の岩をいくつも立て並べたやうな變な岩壁である。茱萸島がある。周圍五六間に過ぎない一小島に茱萸の木ばかりが密生したものである。枝が二本並んで長く出た操の松、傘を開いたやうな枝ぶりの傘松、潮見崎、龜子崎、權現崎、低雲崎、それから葭范の浦といふのにさしかかると、ここは蘆荻ばかりの生ひた珍しい濱で、男性的な奇岩怪石を見馴れた眼には、いかにも優雅な感じが與へられる。夕暮の松と龍ヶ崎との間は陸地が非常に低く且つ狹められて、見越といふ名が付けられてゐるが、それは文字通り此方から彼方を見越すことが出來る所といふ意か、昔はここを水が越してゐたといつて水越の意とするのに據るべきであるか、それは判然しない。龍ヶ崎は澤山突出した大きな岩の上に、どこにもよく見る赤松や雜木の叢生してゐる所で、それは何も異とするに足らないが、注意すると水中に指點せられる巨岩

大石はさながら蛟龍の蟠屈してゐるやうに見えて一寸面白い。中山半嶋の突端は中山崎で、ここから東南が中湖である。中湖のほゞ中央に浮標の見えるのは水深千二百尺あるといふ湖中の最深所である。千鳥ヶ浦・菖蒲崎・蠟燭岩・燭臺岩・朝日ヶ浦・千鶴ヶ崎・綾の浦・さういふ名前を船頭から聞きながら、聞いて點頭きながら眼を移して行くと、赤紫色の漸く多くなつて來たこのあたりの岩の中でも、特に濃い色のもので、而も上に行くに從つてだんだん薄黑くなつて、頂上に松の木のすくすくと生ひてゐる奇峭がある。小町岩である。

綾の浦をすぐれば赤き岩のありあはれ小町岩おほきほとの岩



業平岩にただにむかへる小町岩
かなしきかもよ赤きほとなる

六　方石

船はおさごうち場に着く。中山半嶋はこれで終る。

船首をめぐらして半圓形の直線上を走つてゐた船は、雄偉豪快な御倉半嶋の根基をなす千本松の前を通る。やがて青龍刀を垂直に立て並べたやうな劍岩の前を通る。間もなく屏風岩の前を通る。三重になつてゐる屏風岩の下層は灰色で、中層は暗紫色、

上層は黄金色の所謂金屏風である。それから稍々續いた黒い岩壁の下は、雜木の密生した出崎になつてゐるが、それと相並んで、岩石の美に於いて十和田第一といはれる烏帽子岩がある。惜しいことに岩の上の松が枯れかかつてゐる。絢爛眼を奪ふやうな五色岩の色が紺碧の水と相映じて、此邊一帶を濃艶言語に絶する錦繡となしてゐる。五色岩の上が駱駝岩で、いかにも駱駝の脊のやうに見える突起が三四ヶ所にある。御室・鴨崎・神代浦・女夫松・日暮の崎、これらの景勝の眞上に一大城壁を築いたやうな斷崖の千丈幕が、横に走ること約廿五町、湖面を拔くこと凡そ六百尺、巍然として天空に聳峙してゐる所、雄偉豪快な御倉半嶋の特色を完全に獨占してゐる觀がある。菅江眞澄はこれを「鯨の潮に浮けるがごとく」といつた。中山崎を出はづれる時から始終眼について離れないこの天工の牙城は、前にも書いたやうにこちらから見るのでなしに、反對にこの先の八雲崎の方から中空に高く見上げる所に妙味が出、眞價が現はれ

る。だから出来るならばこのコースを引返して、歸路も再びこゝを通るやうにしたいものである。八雲崎から大蛇灘を廻つて東湖に這入ると、そこにはもう殆ど見るに足るものがない。船は眞直に子ノ口をさして急ぐのであるが、强ひて見ようといふならば、特別に申込んで廻航させねばならない。子ノ口の近くに五色濱・小笠原島・御盥石・富士岩・松倉崎などがある。この反對の側には疊を幾枚も積み重ねたやうな大小の疊岩がある。これで島めぐりが終る。

奥入瀬のたぎつ河瀬の常滑のともしき見つつ木の間を行くも

河の眺めは川を遡りながら見るに如くはない。子ノ口から流れに沿うて見て下る奥入瀬の溪流は、さほど勝れたものとも思はれないけれども、それが逆に燒山から川を遡つて眺めて來る事になると、とても同じものと思へないほどの違ひで、全く面目一新である。同じ所をどちらから見たつて同じでないか、などと無茶をいつてはならない。同じ所が同じやうに見えないから不思議なのである。實は不思議でも何でもなく、當り前すぎるほど當り前なのだが、でもさ

う感じないではお話にならない。しかし後から見て頗る美人だと思つたものでも、前に廻ると興がさめる事はよくあるであらう。奥入瀬の溪流も正にそれだ。天下の絶景だと聞いて見に行つても、流れに沿うて見て下つたのでは全く失望する。で、歸りによく見る事にして、往きには眼をつぶつてゐても可い位のものである。故にいま此處にも逆コースを取つて書いて行つて見る事にする。

紫明溪、それは燒山橋を渡つてから第一に眼に這入る景勝であるが、惜しい事には大正六年洪水のために破壞されて、今はもとの面影を留めてゐないといふ。頗る平凡な流れになつてゐる。惣部橋を渡ると三亂の流れであるが、ここへ來ると景色が稍々整うて少しく見られるやうになる。やがて石ケ戸のほとりで自動車がとまつて、昔、鬼神のお松といふ女賊の住んでゐた岩窟見物の便を與へて呉れる。佛蘭西のドルメンのやうな石ゲ戸は方四間に厚さ三尺ばかりの

一大盤石を屋根にした自然の洞窟で、お松はここを根據地として附近に出沒し、よく假病をつかつては路傍に呻吟して行人の同情を得、脊に負れて河を渡り、中流に到ると背後から突き刺して財物を掠め取つたといふ。數町行つた對岸には奇勝、屏風岩があるが、暫くして兩岸相迫り、數十條の懸崖、溪流を壓してゐる所、雄大な馬門岩に達する。ここから溪谷が益々狹隘となり

白銀の流

水勢が彌々奔激して、去來する美景が應接に遑なくなる。

やうやくにはざまをせばみ岩をおほみここにた
ぎちてさかまく阿修羅

馬門岩から駒止橋を渡つて裸渡橋に至る間には、阿修羅の流れがあり、楓谷があり、七瀬があり、抱返り淵があるが、楓谷はそのあたりに楓の木の多い故の名であり、また八十島とも川千島ともいつてゐるのは、水中にある多くの岩が悉く木を載せ草を戴いて恰も小島のやうに見える故の名でもある。抱返り淵はむかし其所の道が狹くて岩の腹を抱くやうにして渡つたための名であり、裸渡橋は川を徒渉するより外に道がなかつたので衣服を脱いで渡つたための名であるといふ。中でも河の流れがその變化の妙を極めてゐる点に於て、いづれの奔流激湍にも冠たるものは阿修羅の流れであつて、實に筆詞に絶した奇觀を呈してゐる。

岩に觸りたぎつ山がはさやけくも木原どよめて
ながれたりけり

雲井橋を渡ると突端に雲井の瀧が落ちてゐる。白銀の流れのさきは、あちにもこちにも瀧が掛つてゐて、右顧左眄、送迎に忙しいほどである。大抵、木の葉に隱されて縹にそれと見られるものの多いなかに、白絲瀧と九段瀧との二つだけは全身がはつきり現はれていかにも氣持の可い眺めである。對岸にあるのは白布、白絲、不老、トッピロ、九段の各瀧で、通路の眞上から落ちて飛沫が顔にかゝるやうに思はれるのは姫、友白髪、姉妹、寒澤の諸瀧である。やがて鞳鞳の響が聞えて、川幅全体から水を落す銚子の瀧が見えて來る。三十尺の瀑身は決して長いものでないが、幅はその二倍、六十尺あり、十和田第一の大瀑布である。これからは流れの

奇もなく一本の瀧もかかつてゐないので、今まで氣の付かなかつた面白い木立のたたずまひに漸く眼がとまるであらう。奥入瀬の妙味は實はその大半が千古斧鉞の入らぬやうな原始的な樹木にあるので瀧と流れはやつと四割位の役しか務めてゐないのである。假りに此所にこの樹木がなかつたとしたら、いかに荒凉落莫たるものであるか、容易に想像がつくであらう。

獅子岩と林道

すがしもよ河べ小ばやし木をしげみ葉洩れ日あを
くゆれて碎けつ

瀧も河もつひにしかざらむ奥入瀬のこれの雜木の
はやしよろしも

もう少しで子ノ口だといふ所に、百兩橋といふのがある。そこの河の中には大小二つの岩があつて千兩岩、萬兩岩と名づけられてゐる。可なり大きな岩であるから上に草木を戴せてゐるのに不思議はないが、たとひ小さくて始終激流に洗はれてゐるやうに思はれる他の場所の岩でも、この奥入瀬のは殆ど皆な青苔が蒸し草木が生ひて、どれもこれも小さな島の形をなして居るもののみである。これは十和田湖がどんなに豪雨があつても常に一定量の水を流して、未だ

嘗て氾濫したといふ事のないためであるといはれてゐる。やがて獅子岩に來る。獅子の横顔によく似た岩だ。上に羊齒類の草が生ひて蠶に見えてゐる所までさながらである。尤もこれは一旦やり過ごして振り返つて見た時にさう見える形で、始めからはそれほど面白く見えない。間もなく子ノ口に出る。

關上よ大湯のでゆの湯のうへの木群を見れば雲たちわたる

十和田湖の近傍には溫泉地が澤山ある。溫泉のあることが十和田湖をして國立公園たらしめる一條件でもある。十和田が十和田たり得るには大湯溫泉、蔦溫泉、酸湯その他に負ふ所が少くないわけである。

大湯は毛馬内口の沿道にあつて、行客に非常な利便と興趣とを與へてゐる。荒瀬の湯、上の湯、下の湯、川原の湯、いづれも豐富な湧出量を持つてゐるが、溫度は場所によつて多少の差

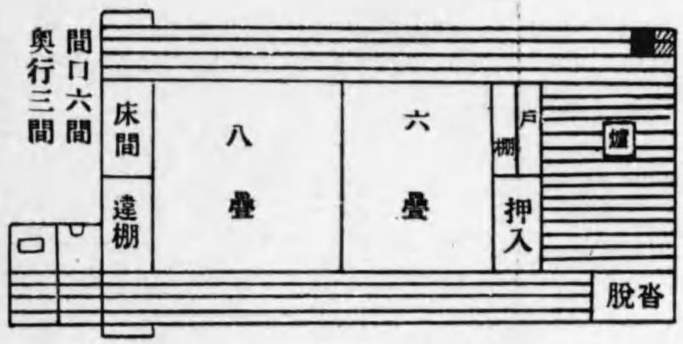
違がある。最高は下の湯にある大湯ホテルで攝氏の七十五度五分である。同じ下の湯でも龜屋は最低の六十九度である。泉質は大抵鹽類泉で、含有成分の主なものは、クロール、ナトリウム、硫酸カルシウム、カリウム、硅酸、礬土などである。浴客は、暑ければ暑いにつけ、寒ければ寒いにつけ、引切らずある。十和田湖畔までは五里。自動車で一時間とちよつとで行けるから、場所としても極めて恰好なのである。途中には止り瀧、中の瀧、銚子の瀧がある。

あはれあはれ蔦のいでゆの夜くだちのかけひの
音よ糸車の音よ

蔦温泉は大町桂月終焉の地として有名であるが、焼山から一里六町、今は自動車も通じてゐる。「淵澤をすぐれば人の里ならず蔦をわたりて神園に入る」と桂月がよんでゐるとほり、もとは可なり峻しい山路であつたが、今はもう「蔦をわたりて」といふ感じがなくなつてしまつた。従つて「神園に入る」といふ氣持も殆ど失はれてしまつた。ここばかりでなく十和田もさうであるが、所謂文明の利器はすべてのものを索莫たるものにする。蔦温泉へも、たとひ新道が通つても、自動車さへ走らなければよかつたのだけれど、さうさせて置かないのが世の中である。海拔千六百尺の高地にあるこの温泉は、大湯と同じやうに鹽類泉であるけれども温度はずつと低く攝氏の四十八度である。高地であり林中であるから、夏でも殆ど暑さを知らない。

桂月がすまはむとして建てし庵いまだ成らなく
に死にしといはずやも

吉田白嶺の彫刻した厨子の中に、小杉未醒の彫刻鑄造にかかる藥師如來を安置して本尊とし



餘材庵平面圖

た藥師堂は溫泉の傍の小丘に建てられてゐる。この堂の餘材で造つたのが桂月がその老後を托さうとした餘材庵であつたのである。庵はあつても住むべき人がゐない。天は何といふ無情なものであるか。せめてたつた一日でも彼を此所に住まはせて見たかつたと思ふ。庵は蔦溫泉旅館新館の背後にある。

餘材庵のかたはらにやどり今宵はも
庵の間取圖を引きてわがをり

桂月の墓は溫泉の東方二町ばかりの密林中にある。自然石を用ひて何等の彫琢を施さない墓石は、自然人桂月を記念するの

にいかにもふさはしいものである。

大き木の楢の木立よこの下に桂月のうしねむり
ましたる

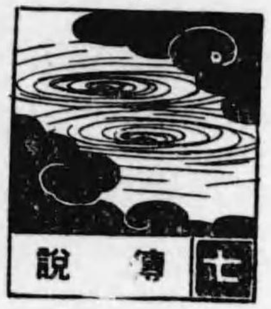
低回顧望、暫しは去り得ないで額を伏せてゐるならば、あとからあとから登詣の學生紳士がやつて來るであらう。桂月の徳も亦偉なりといふべきである。附近五六町以内の所には蔦沼、鏡沼、月沼、長沼などがあつて、泛舟垂釣、半日の行樂を恣にすることが出來る。

更に奥に進み入ると、行程約五里にして酸湯溫泉がある。海拔三千尺、眞夏でも暑さを知らない絶好の避暑地で、その上、治病、探勝、いづれにも好適な幽境である。泉質は酸性硫黄泉で、含有成分の主なものは、鹽化ナトリユウム、硫酸アルムニユウム、硫酸マグネシユウム、

硫酸ナトリユウム、鹽化カルシユウム、その他である。浴場には効能を異にする四つの浴槽があり、湯瀧も澤山あるから、つかつては打たせ漬かつては打たせ、思ふ存分湯治することが出來る。附近には仙人の御庭といはれる石倉嶽や、雪中行軍遭難記念の銅像や、東北帝大の高山植物研究所や、更に新湯、地獄湯沼、荒川溪流、睡蓮沼、瓢簞沼、蛙沼等、見るべきものが限りなくある。若し更に八甲田登山を試みようといふ意圖があるならば、然るべく旅裝を整へ、案内

大町桂月の墓

人を雇うて、快晴の日を待つて決行すべきである。高山に特有な偃松帶やお花畑が見られるのはいふまでもなく、太平洋と日本海とに挾まれた本洲が一眸の下に收められる壯觀は、他に絶体に求められないものの一つである。この一事を悉にする事が出來ただけでも登山の目的が十分達せられたといつて可いであらう。近傍には田代元湯がある。なほ、酸湯と蔦との間には猿倉溫泉と谷地溫泉とがある。



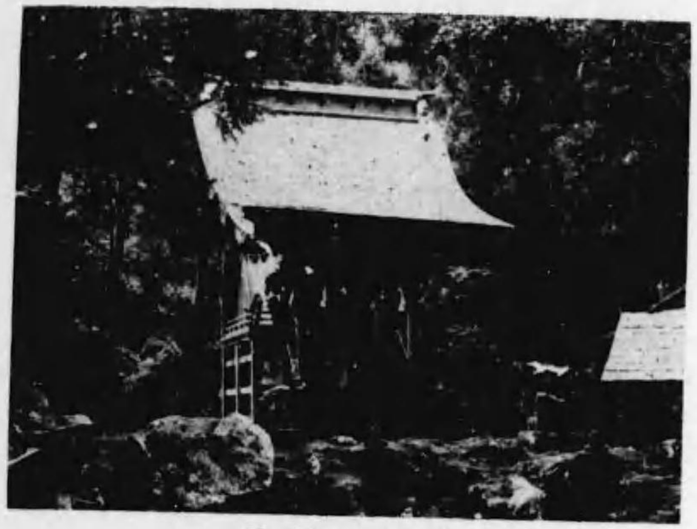
負けし神をしとかなしと十和田女神勝ち
し神おきて男鹿にはしりき

十和田に美しい女神が居た。秋田の男鹿半島の赤神と、津輕の龍飛崎の黒神とが、互に女神を得ようとして相爭つた。赤神は鹿を使つた。黒神は龍を使つた。八百萬の神は岩木山に集つて此妻爭そひを見物した。戰ひはしばらく續いた。赤神は秘術を盡したけれど負けて了つた。黒神は戰ひに勝つて得意であつたが女神を得ることは出來なかつた。女神は負けた赤神が可愛いといつて赤神の隱れた男鹿の岩屋に走つた。黒神は身も世もなく悲しみ嘆いた。その吐息の

ために津輕と蝦夷とが離れ隔つてしまつた。そして數千年が經過した。

谷川をのみほし見ればわがむくろいつかをろち
となりてゐにける

炊事番に當つた八郎太郎は谷に下りて水を汲まうとした。川底に三疋の岩魚の泳いでゐるのが見える。夕餉のおかずに恰度可いと思つて、とらへて小屋に持ち歸つた。蒲燒にして見るとても可いにほひだ。食事の時まで取つて置くつもりであつたが、我慢し切れなくなつて一疋食べた。案の定、たまらなくうまい。二人の友達に殘して置く筈のものまでも食べてしまつた。急に喉が渴いて來た。さつき汲んで來た水を飲んだ。一杯や二杯では渴きがとまらなかつた。桶にありつたけを飲んだが、それでもとまらない。止むを得ず谷に下りて行つて飲んだ。手で



十和田神社

掬つて飲むのがもどかしくなつて川に口をつけて飲んだ。もう夢中であつた。彼は飲んで飲んで飲み續けた。とうとう七日七夜飲んで、川の水を飲みほしてしまつた。ふと顔をあげて見ると、彼はいつのまにか蛇体になつてゐた。

おほあらし吹き荒るるなかにわれはしも生れ
しといふをろち子なれば

八郎太郎は鹿角郡草木村の生れであつた。父を久内と言つた。代々同じ名で、父は恰度九代目に當つ

てゐた。初代久内の父は了觀といつて、北秋田郡獨鈷村にある大日堂の別當で有徳者であつた。たまたま常の彼にも似合はない邪念の生じた事があつた。すると附近にある北沼の大蛇が彼の姿に身をかへて妻の許に通つて來た。妻は間もなく懷胎した。月が滿ちて男の子が生れたが、出産の時に俄に大暴風雨が起つて天地震動した。彼は恐しさに堪へないで、妻子を連れて鹿角に逃げて來たのであつた。

三代目の久内が宮川村の小豆澤に大日堂を建立した。しかし身に蛇性があるので日の光を仰ぎ見ることが出來ず、大日堂の別當にもなることが出來なかつたので、草木村に移り住んで百姓をしてゐたのであつた。

これの笠これの簑をよいとせめてわが父母におくりたまへ友よ

八郎太郎は生れながらにして强かつた。母の腹から出るや否や獨りで立つて歩いたほどであつた。十七の時はもう六尺あまりの大男になつてゐた。無論、力は飽くまでも强かつたが、心は至つてやさしかつた。彼は父母の生計を助けるために、隣村の若者二人と十和田に級剝ぎにやつて行つた。そして三人は代り番子に炊事に當つてゐた。或時二人の若者が山から歸つて來て見ると、――その時だ。彼はもう蛇體になつてゐたのである。彼は二人に事情を話した上、簑と笠とを父母への形見として托した。彼はそこらの川の水を悉く堰き止めて大きな湖をこしらへた。彼はみづからその中に這入つて主となつた。十和田湖はかうして靜かに幾千年かを經過した。

くろがねのわが草鞋の緒切れにけりつひのすま
ひかこのみづうみは

南祖坊が十和田湖畔にさしかかると、穿いてゐた鐵の草鞋の緒がぷつりと切れた。熊野權現のお告げの通り、此所が自分の永住の地であると思つた彼は、自籠の岩に登つて三七日の間禪定に入つて降魔の修業をした。そして、將におさごうち場から湖に入らうとした時に、一大椿事が起つた。湖心に當る邊から俄に波が立ちあがつたかと思ふと、先住者八郎太郎の蛇体が現はれて、南祖坊を目がけて戰ひを挑んで來た。八頭の口を開き、十六本の腕を振り翳し、簑の編目から無數の小龍を出して、すごい勢で迫つて來た。戰ひは七日七夜も續いた。南祖坊はともすれば負けさうになるのであつたが、日頃尊崇する法華經を口誦すると、八卷六萬九千三百八十四字の一つ一つが悉く利劍となつて霰の如く八郎太郎に注ぎかかるので、流石の八郎太郎も支へ切れなくなり、滿身に創痍を受けて鮮血を引きつつ御倉半嶋から逃げうせたのであつた。かうして南祖坊は永久に十和田の主となることが出來たのである。

惠比壽大黑島

さすらひの幾としつきをわれはしもこのみ
ちのくに果てむとすらむ

一体、南祖坊は綾小路闘白藤原是眞の孫であつた是眞は清和天皇の貞觀十三年四月奸者に讒せられて奥州に都落ちをし、暫く陸前國氣仙の岡に逗留したが、そのうちに病を得て薨去せられ、子息是行夫妻は翌年陸中國三戸郡斗賀村の權現堂に辿りついて、別當藤原式部の許に身を寄せることとなつた。そこに無爲安樂な月日が流れた。しかし夫妻の間に子どもないのが、何より淋しかつた。奥方は熊野權現に祈願をこめて、授かつたのが熊之進であつた。熊之進が七歳の時、附近にある永福寺の住職月僧和尚について修業することとなつた。名を南祖坊と改めた。彼は十三になるまで一心不亂に佛道を勵んだ。やがて父母師匠の許しを得て諸國行脚の途に上つた。それから六十餘年間、彼が七十六歳になるまでに紀伊の熊野權現に參詣すること前後三十三回に及んだが、最後の熊野まうでの際は、三七日間參籠して不老不死の祈願をこめたのであつた。すると滿願の夜の夢に權現があらはれて、この山を下りたら鐵の草鞋と鐵の錫杖があるであらう。それを穿きそれをついて諸國を巡化し、草鞋の緒の切れた所を永住の地と定めて法華經を讀誦するならば、必ず所願成就するであらうとのお告げであつたのであつた。

よしさらば鹿角の國をことごとくうみとしなして
われはすまはむ

そのむかし八郎太郎がもやの山を負はむとかけし
繩のあと見ゆ

南祖坊に負けて逃げた八郎太郎は、結極八郎潟に落付いたのであつたが、途中、毛馬内の普門山に繩をかけて瀨田石の雄神と神田の雌神の間に持つて行き、米白川を堰き止めて鹿角全土を一大湖水としようと計畫したのを、鹿角四十三社の鎭守の稻荷樣達が大湯の關上村に集つて相談した結果放逐することにし、諸方から投石して事を成さしめなかつた。そのために今なほ普門山の中腹には當時の繩のあとが殘つて居り、毛馬内の町外れには多くの巨石が散在してゐ

るのだといふ。

八郎太郎は更に北秋田郡七座村に行つて湖を作りかけたが、七座の神が鼠を使つて穴をあけさせた。所が猫が出て來て鼠を捕るので、神は猫に蛋をつけないやうにするからといふ約束をして、鼠を捕らせないことにした。そこでとうとう湖が出來上らないで、八郎大郎は八郎潟まで落ち延びたのであつた。七座山上の勤鼠大明神と、對岸の小繋とはその名殘だといふことである。小繋は「ねこつなぎ」の「ね」の省かれたものだといはれる。

十和田やま新墾みちをかよひ來ればこれの
かねやまかねふける見ゆ

十和田湖畔に、鉛山といひ、銀山といひ、金に緣のある地名の殘つてゐるのは、いふまでもなく、その昔、鉛鑛を採掘し、銀鑛を精錬した事實を語るものである。最初に見付けたのは鉛鑛で、今から二百六十七年前寛文五年であつた。七瀧村萬谷の與右衛門と泉屋又三郎との發見にかかるもので、その後、元祿六年(二百三十九年前)に南部侯の命令で十和田山の新道を普請してゐる所を見ると、それは無論十和田神社に到る參詣路の開鑿であつたであらうが、また一

面鑛山繁昌の爲と見ても差支あるまい。享保三年(二百十四年前)には銀鑛の發見があつた。採掘、精錬ともに行はれた。百三十年ばかり前、菅江眞澄が來た時も鑛山がなほ續けられてゐたものと見えて「湖の磯山近く鉛ふく坑場あり」といつて居り、また「礦をうすつき、石かね碎音の聞えたり、青金は草節鉛とやいはん、いとよげにぞ見えたる」ともいつて居る。一体、十和田は慶長年間(約三百三十餘年前)に高橋德兵衛といふ攝津の國のものが來て鑛山業をしてゐたが、一時、盛に礦石の出た礦脈が急に切れて出なくなつたので、これは靈地を發掘したための神罰であらうと、十和田神社に殿堂を寄附して立ち去つたと傳へられてゐる。鑛山はその後、南部藩の管轄となり、明治元年に政府の直營となつて、工部省小坂鑛山寮十和田支山といつてゐた。明治十七年には藤田傳三郎の借區となり、漸次、繁榮に繁榮を重ねて、十八年には小學校が開設されるまでになつた。しかしその後小笠原半右衛門の手に移るやうになつた頃は

漸く衰兆を見せ、遂に明治廿六年に休山されることになつた。現在なほ可なり良い鑛脈がある と噂されてゐるが、世界の名勝地となつた關係上、採掘が許されないやうである。

十和田新道因別當左馬丞願
五戸郷藩吏木村又助秀晴窺
大守重信公之嚴命曾請之
昔元祿六癸酉歳
七月　日
山中見分之者五戸町　吉右衛門
太兵衛　與左衛門

子ノ口にあるる古碑

かち子かち子はやう出でて見よ湖の面をし
ろがねなして鱒は來にけり

元來、十和田湖には一尾の魚類も棲息してゐなかつた。子ノ口にある銚子の瀧のために魚道が絶たれてゐたからである。所が、湖岸に鑛山の隆盛を見るやうになつてから、當時そこの一役員であつた和井内貞行が、ふとした事に暗示を得て湖水の利用を思ひ立ち、開闢以來、神靈の領知する所として一指をも染める者がなく、空しく放擲されてゐた十和田湖に養魚事業を起さうとし、まづその手はじめに六百尾の鯉を放流した。それは明治十七年、彼が二十七歳の時

和井内鱒の孵化場

であつた。世人は靈湖の神聖をけがすものとして非難し、廣博な大湖に僅少の魚類を放流したからといつて失敗は免れまいと嘲笑した。翌年、鹿角郡長小田嶋由義は、十和田小學校開校記念として一千尾の鯉を放流した。暗愚な世人の蒙を啓く傍ら、これで和井内の事業を策勵したのである。更にその翌年、和井内は岩魚と金魚とを放流した。明治廿二年頃から一尺ばかりの鯉が湖岸を泳いでゐるのが見え出した。それが到る所で容易に捕へ得るほどになつたので住民の密漁が始まつたが、湖水使用權を得て居な

かつたので、それを禁止する途がなかつた。折角の心勞努力が正當に報いられるまでにはまだ相當の時日があつた。廿五年には鮒を一千尾放した。その翌年、十和田が休山したので廿七年から小坂鑛山に轉勤することになつたが、彼が始め鯉を放流してから最早十年になるけれども まだ思はしい結果は見られなかつた。そのうちに湖水使用權をも得たので、請願巡査を置いて濫獲密漁の豫防に充てる一方、漸次幼魚放流の數を增して將來に備へ、並に保護育成に努めたので、こゝに成功の曙光が見えたではないかと思はれるやうになつた。明治廿九年の夏、初めて鯉を捕つて知友親戚の試食に供した。それから諸種の用意を整へて漁獲を始め、各地の市場に出すと頗る好評であつた。彼は專心經營に從事するため、鑛山を退職し湖畔に居を定めて轉住した。歳四十であつた。彼は養魚に努力すると同時に、更に景勝の宣傳に盡瘁して新聞雜誌に通信したり、遊覽者の便に供する旅館を建設したりした。所が最初大漁であつた鯉が漸次稀

薄になり、計劃に一頓挫を來たす事が起つた。元來、鯉の漁期は眞夏の二三ヶ月間だけであるのに、一度網を打つた所には再び寄つて來ない魚なので捕獲に困難であり、たとひ漁が相當にあつても峽しい山路を市場に搬出せねばならぬので意外な運賃を要し、殊に鯉は生魚でなければ殆どその價値がないのに運搬の途中斃死するものが多いの等で、到底採算し得ない狀態になつた。當識で計劃した十數年來の養鯉業は失敗に歸してしまつた。

田も畑も山もはやしもこのうみに入れこそつく
せわが悔いなくに
世の人はわらはばわらへわがおもふことのはか
りを果たさざらめや

しかし彼は更に專門家の言に聽いて鱒の養殖に意を向ける事にした。即ち長男を日光に、次男を青森に、それぞれ派遣して鱒の人工孵化法ならびに一般養魚法の實習をさせた。そして琵琶湖から河鱒五千尾を、日光から鱒卵十萬粒を購入して孵化放流した。その成育繁殖は可なりよく行つたけれども、河鱒は湖外に流下し、日光鱒は散住性のため意の如く漁獲し得ないのであつた。失敗といはざるを得なかつた。彼はこれまで田を賣り畑を賣り林を賣つて資金を調達した。その結果はこの通りである。鄕黨の嗤笑と世人の不信用とは加はるばかりであつた。しかし彼の素志は挫けなかつた。たまたま北海道支笏湖のカバチエッボといふ鱒が、放流してから三年の後には必ず原流地に回歸して產卵する習性を持つてゐるから、捕獲するにも頗る容易であるといふ話を聞いた。彼は起死回生の思ひをした。彼は資金を作りに狂奔した。けれども最早彼を相手にするものがなかつた。所がここに知己があつた。彼の事業を理解し彼の意圖に

夫人勝子　　和井内貞行

共鳴する一鄕人があつた。彼は悲觀の中にも多大の慰藉と一縷の希望とを得て起つた。明治三十六年五月カバチエッポ五萬尾の放流を行つた。彼は極度の物資欠乏に耐へて長い三年間を送つた。明治三十八年十月の或日、彼は孵化場の物見梯子に登つて湖面を見てゐた。遙か彼方から黑光りするものが數町にわたつて湖面を波立たせながら此方に近づいて來る。間違ひもなくカバチエッポの成魚が大群をなして歸つて來たのである。彼は早速家に歸つて夫人勝子の手を取つて湖岸に連れて行つて、暫しは歡喜の涙に

むせんだのであつた。彼は成功した。努力は報いられた。思へば創業以來二十二年間、當時廿七歳の青年和井内はすでに四十八歳の中老になつた。二萬數千圓の家產も蕩盡した。けれども初志は貫徹した。彼は着着事業の擴張整備を計つた。それが漸く緒に就いた明治四十年、困苦窮乏のなかにあつて能く事業の達成に助力し、多くの子女を養育した夫人勝子が病沒してしまつた。彼の悲歎はいふまでもないが、永年恩顧を受けてゐた湖畔の住民は慈母の遠逝に逢つたやうに悲しんだ。彼等は夫人生前の德を慕つて勝漁神社を營んだのであつた。

彼はその後ひたすら事業の發展と景勝の紹介とにつとめ、殊に國立公園編入の請願をさへした。彼は六十五歳で病に斃れるまで十和田湖のために努力を續けたのであつた。彼の墓は、夫人の墓とともに大川岱にある。

おのづからなれる十和田のくすしさのこの
いみじさを語りつぎゆかむ

傳說、鑛山、蓡魚――過去の十和田はこの三時代に劃することが出來る。しかし將來は國立公園として世界に誇る十和田でなければならない。國立公園としては

第一に、天然の優越したる大規模の景致を含むこと

が必要である。十和田國立公園は所謂雲上の神祕境たる十和田湖そのものを中心とすることは勿論、雄大無比の八甲田連峯より、櫛ヶ峯、横岳の群山を籠め、名湯蔦溫泉の仙境を入れ、天下の奇勝奥入瀨の溪流を含んでゐるのだから、これほどすぐれたおほ仕掛なものはさう澤山な

いであらうと思ふ。しかも

第二に、天然の景致、殊に森林、溪谷その他の損傷の程度極めて輕微なること

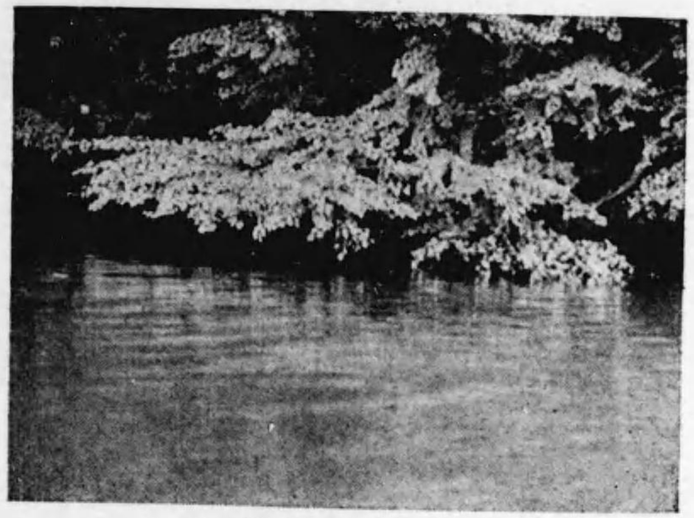
といふ條件には、殆ど無鑑査で通り得るほど原始的の姿そのまゝを存してゐる十和田である。嘗ては鑛山業が殷盛を極めて、人間の手の這入つた事は可なりあつたけれども、今や既に時代の寂びに蔽はれて、纔に地名に當時を偲ばしめるものが殘つてゐるのみで、全く原形に復したといつて可い位である。奥入瀨の紫明溪が傍流氾濫のため損傷したのは甚だ遺憾な事であるけれども、これとても全溪流の上から見ると極めて輕微なもので、特に擧げるに足りないであらう。

第三に、天然景致の種類多樣なること。溪流、瀑布、潟沼、原野等の關係あること。就中學術研究上天然記念物を含み、史蹟文獻上の關係あること

東北帝大高山植物園前から見た
八甲田山

山あり川あり、といへば一口に言ひ盡したことになるが、仔細に觀察すれば、既に縷述したやうに、或は遠望大觀によく、或な接近凝視によく、連山重疊遙に雲際を極めるかと見れば、深潭碧水眼下に無比の幽邃を湛へ、更に激流奔湍、岩を嚙んで跳躍すると、飛瀑幾丈素簾を懸けて天空より落ち來たる。これに配するに蒼たる森林、沈靜せる沼池、更に一望千里、際涯を知らない大曠野を以てする。文字通り多種多樣な景致である。また八甲田山麓に東北帝大の植物實驗所、高山植物

園がある一方、十和田湖の水そのものの化學的成層が實に珍しいものだといふ。即ち表面は鹽基性で、中層は中性、底水は酸性であつて、成分の異る水が斯くも明確に測定せられる例は稀なものであるといふ。更に水の溫度が、夏に於いて表面二十二度を示す時に約九十米の深所では四度まで降り、更にその下に行くと降るべき溫度が逆に昇つて五度になる。これは實に學術研究上一異例となすべきものであつて甚だ珍しい現象だといはれる。かういふ種類のものを搜し求めようならば、他にいくらあるか、計り知られないであらうと思ふ。天然記念物としては附近に、法量の公孫樹(法奥澤村淵澤善正寺址)大圓寺(大杉(大湯町大圓寺境内)小坂の噴泉塔(小坂町相内)などがあるが、しかし何も遠くに求めるまでもなく十和田湖そのもの、奥入瀬溪流そのものが、昭和三年四月十二日に、名勝及び天然記念物として指定されてゐるのである。湖畔一帶の風景をなす植物群落は、三好學博士によると、山腹の密林、湖岸の樹叢、及び



湖岸の水際植物

その樹下植物、殊に屹立した岩壁の水線に現はれた水際植物で、普通小範圍に發生する水際植物が十和田湖のやうな廣濶な岸邊を通じて生育してゐるのは稀有な現象であり、また比較的寒性植物の多い十和田湖畔に、なほ蔓木蔓草が盛に林木に纏繞してゐるのも珍しく、林中植物の種類の多數な事も、奥羽地方の同一高度に於ける植物區系を代表するものであるといふ。佐賀德治氏は五百八十四種を數へてゐる。史蹟としては錦木塚（錦木村古川）猿賀神社（柴平村猿賀野）などが附近にあ

る。

第四に、交通の關係遊覽に利便多きこと、殊に大都市との連絡利便多きこと

數年以前までは是非とも徒歩に依らなければならなかつた道路も、最近は開鑿修繕等を施した結果、自由に自動車の通れるものとなり、主要路線を選んで遊覽を試みるならば、その日歸りで十分所期の目的を達し得るやうになつてゐる。即ち秋田方面からするには毛馬内口があり小坂口があり、盛岡方面には五戸口あり三本木口あり、弘前方面には大鰐口あり黑石口あり青森方面には青森口があるといふ風に、四通八達、人各々の好みに從つて、いづれの方からでも這入つて、いづれの方へでも拔けられる利便この上もない通路があり連絡關係がある。單純な一筋道を往還せねばならぬやうな無趣味な場所とは同日の談でないのである。だから少しく順路に意を用ひるならば、決して同じ場所に立たなくても濟む筈である。

湖畔の植物群落

第五に、觀賞遊覽に適し天然との調和を破らざる人工物等ありて愉安の設備あること、殊に溫泉あるを可とす

遊覽船の發着する場所では到る所に水泳に興ずる老幼男女の群り居るのを見るであらうが、更に沖合遙かに眼を放つならば、貸ボートを操るもの扁舟を浮べて釣を垂れるもの、それらが所々に點在してゐるであらう。近代的設備を施した旅館及び休憩所が、樞要の箇所に軒を並べて建つてゐることはいふまでもないが、それに附隨して若人の

無聊を慰めるに十分なコートやグラウンドの設けも一、二に止まらない事であるから、少しも邊陬の地にあるやうな物足らなさは感ぜずに過ごせるであらう。なほ若しそこに俗塵の厭ふべきものを見出す人があるならば、足、數里を離れるまでもなく、靈泉滾々、朝夕に新たに、日夜に鮮かな湯の宿——蔦、酸湯、大湯——の仙境のあることを忘れはしないであらうと思ふ。

以上逐一縷述したやうに十和田湖は國立公園としての五大要項を完全に具備して一の缺減もない理想的なものである。實に五大要項の如きは十和田湖のために特に作られたものであるといつて可いほどでないか。

昭和八年十月廿七日印刷
昭和八年十一月一日發行

【定價 四拾五錢】
送料四錢

不許複製

著者　秋田縣北秋田郡大館町金坂　村木清一郎

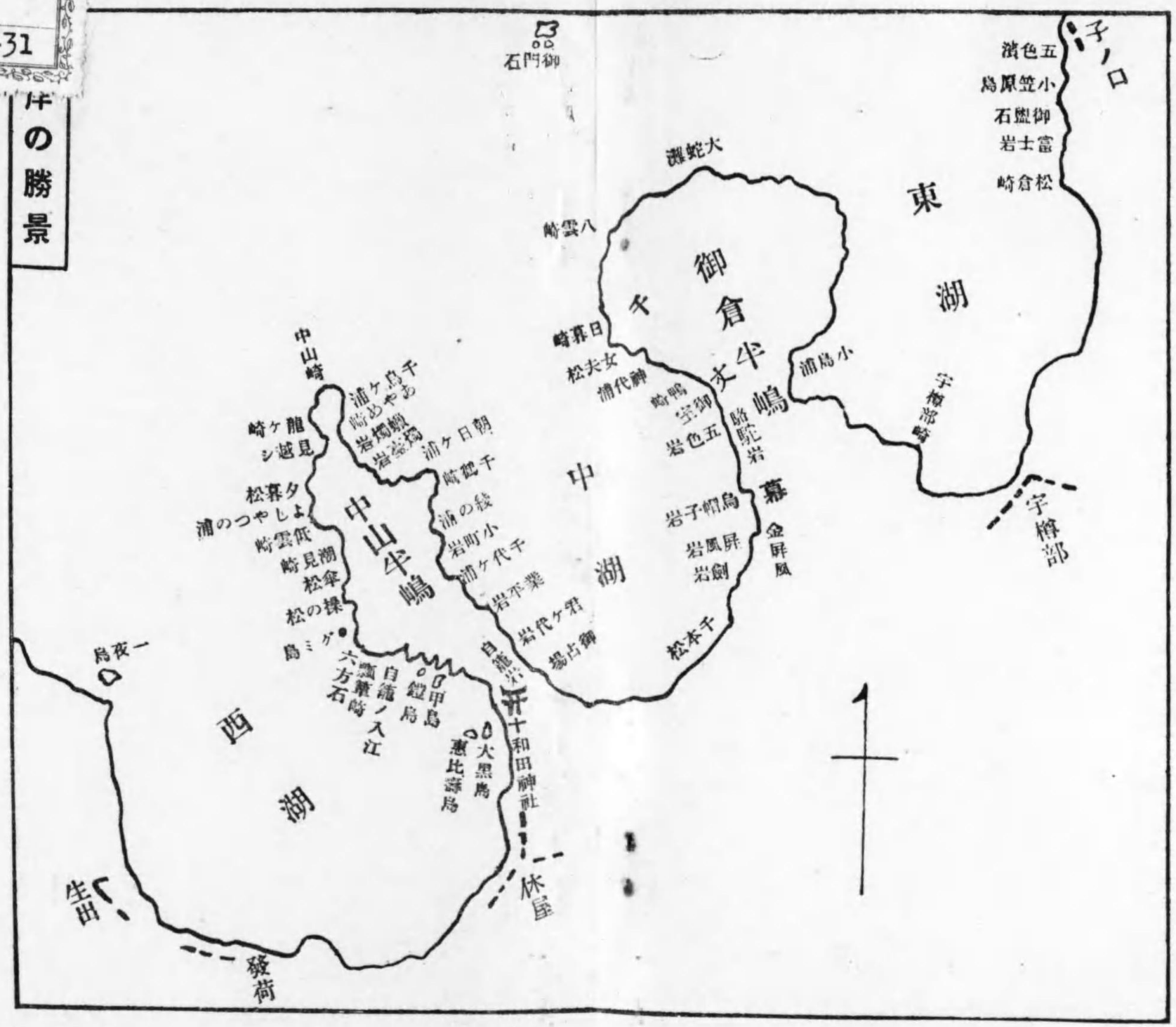
發行兼印刷者　秋田縣北秋田郡大館町馬喰町　武内良之助

印刷所　秋田縣北秋田郡大館町馬喰町　大館印刷所

發行所　大館印刷所出版部
電話一一五番

347
431

伊の勝景


御倉半島
中湖
東湖
西湖
中山半島
子ノ口
宇樽部
休屋
生出
發荷
御門石
濱色五
小笠原島
石盤御
富士岩
松倉崎
大蛇瀬
八雲崎
日暮崎
松夫女
潮代神
小島浦
宇樽部
鴨崎
宇御
五色岩
駱駝岩
幕
金屏風
烏帽子岩
屏風岩
剣岩
千本松
中山崎
龍見越
夕暮松
よしつの浦
低雲崎
潮見崎
傘松
棟の松
ミゲ島
千鳥ヶ浦
あやめ
燭臺岩
岩
朝日ヶ浦
千鶴崎
綾の浦
小町岩
千代ヶ浦
業平岩
君代ヶ岩
御神場
六方石
瀧籠崎
自鑑ノ入江
甲島
鎧島
大黒島
惠比壽島
十和田神社
一夜島

終